5年2組 社会科の実践

田島 裕司・佐藤 幸恵

(給食の時間や課外の活動等における食育の実践)

- 1 小単元名 「これからの食料生産とわたしたち」
- 2 本小単元における子どもの学び

(1) 学級の子どもの学び

Aさんは進級後の社会科の学習で他地域の情報を知ることの喜びを実感していて、幼児期まで他県 (福島県)で生活していた経験から、山形県外の情報についての関心が高まっている。Bさんは、年度当初、教師や友達の話をしっかりと聞くことはできるものの、自分の思いや考えを積極的に発言することはなかった。しかし、後期に入った頃から指名をすると自分なりの考えを発言することが出てきた。一方で、時事問題について考えたり、積極的な発言には苦手意識を持っている。学級の特色としては、時事問題や発展的な学習内容に対して反応が良く、積極的に質問したり確かめたりして、能動的に学ぶ姿が見られる。しかしAさんのように、その影響を受けて自分らしさを発揮し、そこに喜びを感じ出している場合もあれば、Bさんのように、興味・関心はあるものの、途中から質問の内容にいていけなくなることで、自分の言葉で表現することを躊躇してしまう子どもも見られる。AさんもBさんも今起きている社会のことをみんなで話し合うことの大切さは感じているが、前者は時事問題は好きと回答し、後者はどちらかと言えば嫌いと回答している。発表や話し合い活動については、後者は意見を出すのが苦手意識を持っている。

学級全体のアンケートの結果を見ると、社会科が好き(48%)どちらかといえば好き(43%)と回答した子どもが多く、実際にものを見たり体験したりすることが好きである。学習内容を発展させた時事問題については、好きと回答する子どもが66%、嫌いと回答する子どもが33%とやや分かれている。その背景として、テレビ報道等で最近の社会情勢に関心を寄せている子どもと、そうでない子どもがいる現状がうかがえる。発表や話し合い等、声に出して考え合うことについては、好き(52%)、どちらかと言えば好き(29%)、どちらかと言えば嫌い(19%)、嫌い(0%)という実態で、自分の考えを声に出すことにあまり抵抗感はない傾向がある。ただ、実生活や友達の考えと関連づけて話そうとする意欲までは高まっているとは言えない。最近、挙手した子ども以外にも指名することがあっても、何も発言することがないわけではなく、自分なりの思いや意見を言えることも多くなってきた。また、実体験を多く取り入れてきたことを踏まえた発言も増えてきた。そのときにはその都度、その子なりの成長を他の友達と共に具体的に称賛してきた。

先日、「バケツ稲づくり」で稲刈りや脱穀、籾摺りを行ったが、授業時間だけでは終わらなかった活動も、休み時間等を積極的に活用し、AさんもBさんも友達の先頭に立って大変意欲的に活動することができた。その際、授業での発言以上の能動的な関わりで友達と活動し、「自分たちが育てた米」という意識を持ち、より早く、より丁寧に、明るく活動する姿が大変印象的であった。山形の新品種「雪若丸」が販売されたり、給食に出たりしたことで、品種改良の今についても、自分自身のことと重ねて考えることができている。昨年度で国による米の生産調整が終了したが、この生産現場や消費動向の変化をもたらすであろう時事問題にも関心を寄せる素地ができつつあると考える。また、学年のコンクール形式で進めている。精米された自分たちが育てた米のネーミング、さらにオリジナル米袋づくりも、栽培活動や試食を通し、自分らしさを発揮する中で、友達と協力したり、考え合ったりすることのよさを実感することができているところである。

(2) 本小単元を構成するにあたって

単元は、学習指導要領の内容(2)のア「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること」を扱う、この単元は、第1小単元「くらしを支える食料生産」、第2小単元「米づくりのさかんな地域」、第3小単元「水産業のさかんな地域」、第4小単元「これからの食

料生産とわたしたち」の4つの小単元から構成されている。本小単元は、単元「わたしたちの生活と食料生産」の中にあるが、単元「情報化した社会とわたしたちの生活」の後に学習する。事実と違う報道や大袈裟な番組企画、風評被害等についても学んだ上で、子どもたちにとって最も身近な食料に対し、如何に関わっていくか、主体的・能動的に学んでいくようにさせたいと考えたからである。検査や検査データ偽装に係って工業製品の信頼が揺らいでいる事実もニュースにより比較的よく知っている。

昨年4月、ジャガイモの大生産地である北海道が台風によって大打撃を受け、ポテトチップスが販売休止となった。社会科の授業開きでは、子ども一人一人にとっても、時事問題をより身近に感じる契機となった。これまでも、単元の節目節目に今日的な課題を含んだ社会的事象を身近に感じさせる問題提起をしてきた。そのことで、社会の空間軸や時間軸での広がりを、自分事として感じ取る子どもが徐々に増えてきている。その中で、農業や水産業も、我が国が抱える課題を克服させるよう、国土の特色を生かしながら、生産者は多くの時間をかけて現代の技術まで高めてきたことを理解してきた。また、国による生産調整が終了したこと、米の新品種が全国各地で開発され、販売されている事実については全国の米袋集めや「米の新品種特設コーナー」の展示、「お米クイズ」のイベント等で、いろいろな情報にも触れてきた。県庁新品種担当部課やJA(くまもと売れる米づくり推進本部等)との双方向な関係も構築できている。一方で、メディアリテラシーの問題を実感する出来事や検査偽装等のマイナスの側面にについても知り、誤った情報が安全・安心を揺るがすことになっては、視聴者との信頼関係は構築できないことも十分に理解できた。

子どもたちは、「バケツ稲づくり」を通し、稲の生長過程や生産者の工夫や努力の一端を知った。また、オリジナル米袋づくりでは、消費者の目に一番最初に触れる袋について、生産者として消費者にPRするための工夫を経験している。これらの過程があって、消費者との情報でのつながりを実感したことで、私たちの生活と食料生産が密接に結び付いていることを知ると共に、消費行動という形で社会に参画し、さらに能動的な関わりを模索していこうとする子どもを育てていきたい。

今日、主権者教育の重要性が指摘されているが、参加型ではなく、小学校段階から参画型の学びを志向していく必要があると考える。現在起きている社会的な課題に向き合い、必要に応じてその課題と直面している社会人とのコーディネートを図る必要があると考える。本小単元との関連で、「くまもと売れる米づくり推進本部」の事務局長、埼玉県鴻巣市の「こうのとり伝説米」のデザインに関わった選考委員に対し、自分たちがデザインした米袋を見ていただき、意味付け・価値付けをいただく。そのことで、子どもたちは生産者と消費者を結ぶ流通・販売の工夫や努力の実際を体験的かつ実社会との結びつきで学ぶことができるであろう。

本小単元では、生産と消費を結びつける流通について、身近な生産現場から諸外国の生産現場まで流通を通して幅広く私たちの食生活と結び付いていること、加えて、安全・安心の重要性も増してる中において、必要な情報を伝える工夫や努力を考えていく。表記上は「安全・安心」を並列してあるが、安全な配慮をして生産した食品であっても、消費者に必要な情報が伝わっていなければ安心の提供はできないように、安全と安心は別次元の問題である。それをより深く学んでいくため、風評被害についても一消費者として、自分自身が安全・安心と考える食品を選択するという消費行動にどのような情報を必要としているか、農林水産省や環境省環境再生プラザ、福島県(農産物流通課・県産品振興戦略課・水田畑作課等)からの資料を活用する中で、一層主体的に考えさせていきたい。また、「バケツ稲づくり」と実際の米づくりとの相違や自然環境との結びつき、さらに国による生産調整が終了したことに伴う生産者や社会全体の動向を「つや姫マイスター」で新品種「雪若丸」も生産する専業農家を招聘し、情報交流をする中で米の大生産地である山形でも大きな動きがあるであろう社会的背景を考えさせていきたい。これらのことを通し、食料生産を、生産者と消費者の目線から複眼的に見つめ、主体的かつ能動的に理解を深めさせていきたいと考える。

3 本小単元で目指す自己の学びを創り上げる子どもの姿

(1) 小単元の目標

◎ 地産地消の広がりや食料輸入品の増加等、食料生産に関わる身近な社会的事象を調べることを手がかりに、食料自給率の低下や食の安全性の確保等、日本の食料生産が直面している今日的課題について考え、他地域や世界との関わりを意識した食料生産と安定供給のための工夫や努力が必要であることをとらえさせる。

【社会的事象への関心・意欲・態度】

実生活に関わる問題として食料生産に関心をもち、日本が抱える食料生産の課題を見直し、これからの食料生産について意欲的に調べようとする。

【社会的な思考・判断・表現】

日本の食料生産が抱える問題について調べ、多くの地域や世界との関わり、環境との調和を大切にしながら安定した食料生産に取り組む必要性について考え、まとめることができる。

【観察・資料活用の技能】

グラフや図表、新聞等、様々な資料を正しく読み取り、それらを関連づけ、資料を根拠に日本の食料生産 の現状と課題を把握することができる。

【社会的事象についての知識・理解】

日本の食料生産には自給率の低下や安全性の確保等の課題があり、地産地消や自給率向上のための工夫、他地域や世界との調和を大切にした努力が必要であることが分かる。

(2) 自己の学びを創り上げていく子どもの姿

今日的な課題に対してもいろいろな資料や友達、社会人等と対話する中で、主体的・能動的に学び合い、 自分なりに社会的な事象をより深く考えようとする姿

4 学習活動の展開(5時間扱い 本時3/5)

小単元「米づくりのさかんな地域」

学習活動 学びの姿 関わる姿

バケツ稲づくりを行い、田植えから観察してきた米の 収穫を行う(稲刈り→脱穀→籾摺り)。

稲刈りから精	手作業では特	自分たちで育
米まで様々な	に籾摺りが大	た米を食べて
過程がある。	変である。	みたい。

(1)全国の米袋集め(デザインの参考として)

山形県産米を	米の名前や色合い、美味しい
食べている家	炊き方の説明等、デザインに
庭が多い。	いろいろな工夫が見られる。

先日の給食で出た新品 他種「雪若丸」の米袋が 種ある。

他県産米や他の新品 種の米袋もいろいろ な工夫がある。

自分の学びを創り上げていくための手立て

- ・米づくりの過程をバケツ稲の観察と比較しながら理解しやすいようにする。
- ・籾摺りを一人一人が体験する中で、1粒であってもたくさんの工夫や努力の蓄積があることを体験的に理解する。
- ・量は少なくとも、自分たちが育てた米とい う意識を持たせる。
- ・子どもたちが各家庭で食べた米の袋を集めると共に、山形県産以外の米や新品種の米袋を集め、可能な限り、いろいろなデザインの 米袋に触れるようにする。
- ・子どもたちには「米袋デザインコンテスト」の参考にするための意味合いを持たせ、消費者にPRする工夫が凝縮された 作品として考えさせるようにする。
- ・コンテストは、「消費者が買いたくなる」

(2)収穫した玄米の試食をし、(ア)ネーミング、(イ) 入れる米袋のデザインを全員に募集し、グランプ リや特別賞を決定する。

米売り場で目 買って食べて また買ってみ 立ちそう。 みたくなる。 たくなる。

米袋の選考に関わる関係者にグランプリや選考 に関わる過程を伝え、アドバイスをもらう。

- ①「くまもと売れる米推進本部」事務局長
- ②米袋の選考委員を務めた専業農家(埼玉)

日本の食料生産をめぐる問題点①

資料から日本の食料自給率が低いことを読み取る。 わたしたちの食料生産をめぐる問題点①

資料から日本の食料自給率が低下傾向にあることの 理由を考える。

食の安全・安心への取り組み①(本時)

食の安全・安心に向けて行われている取り組みや、 環境との関連について調べ、食の安全・安心に向け た 材料を得たりして、食の安全・安心に係るつ 行動について考える。

これからの食料生産について考える①

「つや姫マイスター」を招聘し、農業と自然環境と の結びつきや本年度から米の生産調整が終了したこ との影響も含めた社会的動向について考える。

これからの消費者について考える①

学習したことを提案カードにまとめ、発表し合う。

- (1)福島県農産物流通課
 - or J A熊本(くまもと売れる米推進本部)
- (2) つや姫マイスター
- ※ 本小単元を通して

継続していくこと。

- という観点で栽培活動や試食の体験を踏 まえてPRするようにする。
- ・学級全員が審査員となり、相互評価を実 施することを確認する。
- ・現時点において、「消費者が買いたくなる 」ポイントをまとめ、本時の観点と比較しや すいようにする。
- ・子どもたちに提案し、グランプリや特別賞 となった米袋を、実際の元選考委員や等に評 価してもらい、さらに「本物感」を醸成する ようにする。
- ・給食の献立から、日本の食料自給率の現状 を考えさせるようにする。
- ・食料自給率低下の背景や国際的な情勢、そ れに伴う課題や対策等について、考えるよう にする。
- ・トレーサビリティの実際を見る等、安全性 を確認したり、消費者自身が安心できる判断 ながりを具体的に実感できるようにする。
- ・第一次産業が自然環境と密接な関わりを持 って営まれていることを知ると共に、本年度 から国による生産調整が終了することに伴 う、新品種生産等の動向にも考えを広げるよ うにする。
- ・これからの食料生産について話し合って きたことを基に、明日からの食料生産にどう 向き合っていくか、提案書にまとめ、情報発 信するようにする。

食育の観点から、一人一人の食に関する 学びの履歴をとらえやすくするように、 「食の日記」を毎時間継続して書いてい くようにすることで、学びの履歴をとら えやすいようにする。

5 本時の学習活動

(1) 本時の目標

食の安全・安心に向けて行われている取り組みや環境との関連について調べ、その社会的背景を知ると共 に、食の安全・安心に向けた主体的な行動について考える。

(2) 学習過程

学習活動 学びの姿 関わる姿

自分の学びを創り上げていくための手立て

- ※ 前時までに以下の課題を提示し、一人一人が調べ学習に取り組むようにする。
 - ① 食に関する信頼を得るための販売の工夫を発見する調べ学習
- ② 食の安全・安心を揺るがす事故・事件についての調べ学習
- [①と②については12/6に課題提示し、各家庭の協力を得て情報収集するように話す]
- ○販売店や包装上にある情報伝達の工夫を発 見し、課題意識を高めるようにする。
- ○過去の事件・事故を一定数列挙し、保護者に 当時の状況を確認するように促す。
- 1 消費者の食の安全・安心への関心が高まっていることを知り、本時のめあてを持たせる。

消費者

生産者

産地偽装等の問題で不安だ

健康で長生きしたい

安心して買っ てほしい

食の安全・安心に対する取り組みは、どのように行われているか、その思いや願いを考えよう。

・ 前時までの提示してあった課題について発表 し合い、課題を共有する。

 袋の裏にQR
 〇〇〇事件に
 私の家では地

 コードを発見
 ついて知って
 産地消を心が

 した。
 いた。
 けている。

- ○スーパーマーケットの商品表示や新聞記事等 から気づいたことを話し合う。
- ○これまで、「バケツ稲づくり」で収穫した米 のネーミング、さらにオリジナルの米袋のデザイ ンを考えた際、その視点を想起させ、安全・安心 に必要な情報を考えさせる。
- ○食の安全・安心を脅かす事件等の経緯や消費者(保護者等)の食品を選択する際の留意点については、各家庭によって相違はあると考えるが、この日までに情報収集してきたことを参考にするように話す。
- ○次時との関連も含め、消費者目線からだけではなく、食品に対する生産者思いや願いについても考えさせるようにする。
- ○安全に配慮をして生産した食品であっても、消費者に必要な情報が伝わっていなければ安心の提供はできないように、安全と安心は別次元の問題であることを、子どもの実態に応じて説明するようにする。
- 2 食の安全・安心に対するスーパーマーケットでの取り組みについて考える。
- (1) 食品に対する信頼確保のための取り組みを 消費者に伝えるための工夫を考える。
 - ①どこで見つけたか
 - ②どんな情報伝達の工夫があったか
 - ③それでどんな安全情報や安心が得られるか
 - どう生産され インターネッ 生産者の顔写
- ○先週末に課題を提示して以来、食品の流通において、その安全・安心を私たち一人一人に伝えるための取り組みを調べてきたが、その中で、一人一人が収集した情報を積極的に取り上げ、消費者の要望に添う形で情報が提供されていることを実感できるようにする。
- ○自分であればどんな安全情報や安心が得られるか、自分なりの考えを引き出すようにし、それらを尊重し合うする。

ているか調べ	トで調べるこ	真があって安	0
られる。	とができる。	心できる。	産

※ 事例として、QRコードを活用し、トレイサビリティの実際を知る。

- ○トレーサビリティの意味を確認する際には、生産者が自信をもって出荷したり、消費者が安心して購入することができたりするための取り組みであるという目的や、どのように栽培してきたか見て取れるという内容に分けてとらえるようにする。
- 3 福島県産米の販売量の推移や全袋検査の取り 組みを通し、食料生産と環境との関わりから調 べ、社会的背景を考える。
 - (1)「福島県産米の生産量推移」から、東日本 大震災以降に被災地で起きたいろいろな問題 について考える。
 - (2) 消費者として、安全・安心ためにどのよう な情報がほしいか、消費者目線の率直な疑問 を基に主体的に考える。

東日本大震災 震災で流通に 原発事故で放

JIC IT I J CALCOC	120000000000000000000000000000000000000	// // 1. P/C C ///
で田畑が使え	使う交通網が	射性物質が飛
なくなった。	破壊された。	び散った。
美味しい米な	放射性物質の	赤字で農家の
のに値段が違	検査はしてい	生活は大丈夫
う理由は?	たのか?	なのか?
今はどんな対	他の農産物も	調べ学習で見
策をしている	同じようなの	た対策はして

(3) 栄養教諭の話から震災後の問題を考える中で、風評被害の概要について知る。

いるのか?

- ◇消費者からの問い合わせ
- ◇安全・安心を担保するための取組み

か?

のか?

- ◇生産者と消費者との板挟み状態 等
- ※ 背景として、原発事故による風評被害と 考えられるが、放射性物質の影響等につい ては深入りしないようにする。
- (4) 風評被害の払拭に向けた対策について、米

- ○(1)と(2)について、東日本大震災についての 知識は個人差があると思われるので、子ども一人 一人の知識をつなげ合わせながら、農業が直面し た問題に迫っていくようにする。
- ○安全・安心に関する情報以外にも、震災後の 農地の状況等、消費者として知りたい情報につ いても、考えられるものを整理していくようにす る。
- ○放射線については内容が高度な知識を要する ため、(放射線)医療との関連で、環境再生プラザ (福島)から提供された小学生向け資料を事前に 配付し、参考にするように投げかける。
- ○東日本大震災以降の風評被害の典型的な事例 を基に、安全と言われるものでも安心されないと 判断されたのか、地図で位置関係を確認しながら 進めるようにする。
- ○農産物の安全・安心のために必要な情報は何か 、先述の事例から芽生えた疑問を出し合い、それ に対応した情報伝達の手段について協同的に考 えるようにする。
- ○風評被害の基となっている、原子力発電所事故 の概略とその後の第一次産業の現状について、想 像できることを出し合うようにする。
- ○子どもたちの実態を踏まえ、震災や原発事故等の安心を揺るがす影響の社会的背景については簡単に触れるようにする。
- ○安心の観点からは、その基準は個人の判断に 依拠することであり、子どもたちが購入するかど うかの具体的な決定を迫ることはせず、あくまで 多くの消費者はどのような情報を必要としてい るのか、より主体的に考えていくようにする。
- ○CM動画を観ることを通し、イメージや販売に 係る戦略に関心を持たせると共に、グローバルな

の全袋検査や「ふくしまプライド」等の取り 組み、「福島県農産物の輸出状況」のグラフ 推移から感想交流をする。

- ① 国内向けとして、メディア情報の発信や 直接販売等を通し、震災以前の状況回復を 目指していることを理解する。
 - ・有名人(TOKIO)の起用
 - アニメーションやキャラクターの活用
 - ・販売促進イベント実施
 - オンラインストア活用
 - ② 米の市場規模が頭打ちの状況下、海外向 け市場開拓に可能性を見出している戦略に ついても簡単に触れる。
 - ・日本食ブームと食材のパッケージ戦略
 - ・高価格帯の品種改良

- 視点で海外市場に対する日本食の展開について のも視野を広げる。
 - ○同様の取り組みは全県的な課題として福島県 で行ってるが、山形県を含む他県の情報伝達の手 段にはいろいろなアプローチがあることを必要 に応じて提示できるようにしておく。
 - ○第一次産業の担い手不足と高価格帯の新品種 誕生、消費者の嗜好の多様化等、日本の課題克服 に向けた戦略の一端であることを知る。その際、 山形県内の農業事情と関連させることで次時へ 結びつけるようにする。
 - ○「いわき野菜アンバサダー」等の消費者自身 の市民参画型の取り組みについて着目させる ようにする。

4 食の安全・安心に向けた情報開示の取り組み をまとめ、そこから見えるものから消費者とし て るよう、個々人の不安を払拭する取り組みがなさ 自分なりの考えを持つ。

売り場に表示 トレーサビリ 実際に生産者 されているも に会って、話を ティを実際に のをよく見て 体験してみよ 聞いてみたい。 みよう。 う。

- ○トレーサビリティ等、消費者が安心と判断でき れていることを確認し、本時のまとめてしていく
- ○前時と同様に「食の日記③」に、自分なりに考 えたことを書くようにする。
- ○次時の予告をし、「つや姫マイスター」が来校 し、いろいろな話を聞くことができることを話し 、一層の意欲化を図る。

(3) 評価

安全・安心な食料の確保のためには、食に関心を持つことや食料を生産するための環境についても考えて いく必要があることを自分なりに考えることができたか。 (発言・食の日記③の記述)

5 子どもの変容

(1)小単元「これからの食料生産とわたしたち」前後の関わりを通して

子どもたちが家庭から持参したQRコードを活用したり、調べてきた過去の食中毒事件について事例とし て取り上げたりしたことで、授業中の積極的な発言という行動以上の能動的な関わりが増えていった。両者 ともに授業で学んだことや調べたいことで、授業が起点となった学びがスタートしたり、授業で取り上げら れたりしたことで、探究意欲が高まる契機となった。Aさん、Bさん共に、学習意欲が授業中の積極的な発 言に結び付きつつある状態であったが、Aさんは福島県出身と言うことでさらに積極的に意見が述べられた り、Bさんは今日的な課題で自分自身にとって難解であっても、教師から出される情報と友達の発言とを参 考に考えることができていった。本時以前は、山形県内や、調べたことから想像できる内容であったが、本 時はあえて他県の難解な社会的事象を扱った。しかしながら、既習の内容や関連する体験活動、自分自身で 見聞きしてきた事象等を相互に関連させ、より一層主体的に調べていきたいという気持ちが前面に出るよう

になった。Aさんは福島県の食の今に関心を高め、さらに自分なりに調べ応援していきたい手紙で表現していた。特に福島県産品の販売促進の取り組みに注目しているようである。

授業中の様子や「食の日記」の記述を通し、自分たちと直接関わる食の課題を、教科書の内容を起点としながらも、実社会の中の目には見えにくい具体的な事実を探し出し、その社会的背景を考えていく学習のスタイルが身に付いてきた。昨年、蔵王山の噴火警戒レベルが上がったことを授業で取り上げたが、情報を多面的・多角的に考えていこうとする雰囲気が感じられる。今後とも、子どもたちに身近な時事問題を必要に応じて取り入れ、いろいろな学び方、考え方を高めていきたいと考える。

(2) 給食の時間等、社会科以外の関わりを通して

日本の食料自給率について学習する時期に合わせて、給食室前に食料自給率関連の資料を掲示したり、給食の時間には日本の食料自給率が低下傾向にある中で子どもたちの身近な給食はどんな工夫をしているのか紹介したり、給食が生きた教材となって子どもたちに発信することができた。このような関わりができたのは、教科担任と学習の進捗状況や目指す子ども像を共有できたからで、教科にとどまらず、給食の時間や日常生活の中で、食の様々な課題と向き合い、子どもたちが知ったこと、できることをどう行動へうつすか考える時間へとつなげられたと考える。

子どもたちが米袋のデザインをする際に消費者の目につく表示や情報が大事であることに気づき、意識しながら取り組む姿が普段の生活の中にも根付き、米袋に限らず様々な商品の表示や産地を意識して見るようになった。この姿は子どもたちの将来を見据えた食育に関わる資質・能力を育てる大事な要素と考える。

6 実践を振り返って

(1)小単元「これからの食料生産とわたしたち」に至るまでのカリキュラム

小単元を通し、可能な限り新しい情報を教室外からも求め、それらの情報により一人一人が成就感や達成感を抱くことができた。それらのことで、社会の変化を実感し、課題の背景として、見えにくいものを探していこうとする意欲の芽生えにつながった。学習素材となったものが、子どもたちにとって身近な食であったことも良かったと考える。本小単元は栄養教諭とT.T.を行ったが、給食を起点として学習をはじめたこともより実感を伴った理解につながった。

① バケツ稲づくり等、体験的な活動

春からバケツ稲づくりに取り組んだ。稲の栽培から稲刈り、脱穀、籾摺り等の体験を行ったことで、米作りの一端を実感することができた。本時では生産者と消費者を結ぶ商品表示を考える部分もあったが、実体験がそれらを繋ぐ結節点となることもあった。収穫した米の試食を行ったが、自分たちが育てた米ということで一層身近に米作りを感じると共に、生産に関する一連のサイクルを実感することができた。

② オリジナル米袋デザインコンテスト

子どもたちの普段食べている米の米袋集めから、たくさんのデザインや表示があることを知った子どもたちは、全員がバケツ稲づくりで育てたオリジナル米の米袋のデザインをすることになった。集めた袋のデザインを参考にしたり、消費者の目につく表示や情報を意識したり、いろいろなデザインが創出された。子どもたちの相互評価で、付箋にコメントを記したコンテスト形式にしたことで、いろいろな視点で米を選ぶことを消費者目線で実感することができた。グランプリ等の入賞者にはJAから提供された熊本や新潟の新品種等をプレゼントしたが、コンテストに対する一層に主体性を喚起することはもちろん、新品種のPRの実際をその米袋や販売促進グッズで感じ取ることができた。今後、家庭科の調理実習の際、3学級それぞれ3つの新品種を試食する予定で、自分や家族が食べた感想を提供先に送付する計画である(熊本、新潟、岩手、宮城)。

③「つや姫マイスター」出前授業

「つや姫」を生産している宮城県や島根県の事例を起点に、「なぜ他県で山形県のつや姫が生産されているのか」という問題提起をし、そこを起点につや姫の戦略について、自由に意見を述べ合った。その話し合いのプロセスで共有化した課題を、「つや姫マイスター」の意見をうかがう授業スタイルとした。授業者はファシリテーター役を務めた。経済・経営面も含めた生産者の経験談を通し、本年度で国による生産調整が終了する生産現場の実態を自分自身の食生活との関わりで考えることができていた。また、生産者とのface to face の関係から、米袋のデザインやバケツ稲づくり体験等の意味付け・価値付けをいただいた。それらのことで、大単元を通したカリキュラムの生活単元化を図ることができた。

④ 関係機関等との情報交流

バケツ稲づくりではバケツ稲事務局(日本農業新聞)、お米クイズでは J A 熊本経済連売れる米づくり推進本部、米袋デザインコンテストでは、埼玉県鴻巣市の専業農家(米袋デザイン選考委員)や大阪市の米流通業元社員(米袋デザイナー)、食育雑誌(全国学校給食協会)の編集部との情報交流を行ったことが起点となり、学校外の専門的知識を持った社会人に関わることで得られる情報の新鮮さやストーリーに共感したり、より深く学んでいこうとする意欲につながったりすることが数多くあった。米の新品種では、北海道や青森県、岩手県、宮城県、福島県、新潟県、富山県、島根県、熊本県の道県庁担当課、また、福島県農産物流通課等から最新の情報を収集できたこと、手紙等を通した双方向の関わりを通し、探究していく楽しさも芽生えてきた。

本小単元では、学級全体での協働解決が中心であったが、課題別等、小グループやペア学習での対話的な 学びを積極的に導入していくことで、より一層社会の一員として主体的に考えていく子どもを育てることが できると考える。大きい付箋を活用した「食の日記」同様、学びの履歴や友達相互の比較をしやすいよう、 小グループ内外での活用も視野に入れていきたいと考える。特に安全・安心や風評被害等、明確な答えが出 にくいようなことに関わる話し合い活動では、その有効性についても、これから考えていきたい。

(2)小単元「これからの食料生産とわたしたち」や授業での学びを契機とした広がり

① 風評被害の始まりと現状について

安全と安心は並列的に表現されてはいるものの、意味が全く相違することを風評被害の実情から実感することができた。しかし、目に見えない放射線被害に対する恐れの社会的背景には十分迫ることはできなかった。本時において、何かに包んだような表現ではなく、風評被害の不条理な切実感・必要感を伴う実態についてさらに数字的なものも含め、明確に提示しても良かったと考える。

② 販売促進等に係る戦略について

東日本大震災の被害の側面よりは、原子力発電所事故以降の放射性物質の拡散が風評被害の原点であり、その一言では語りつくせない社会的背景や闇については、今後の子どもたちの学びに期待したいところである(子どもたちには環境再生プラザ作成の児童向け資料は配付済)。安全・安心の情報発信は継続しているものの、まだ震災以前の販売量・価格には至っていない現状については、その不条理さを被っている人々に共感していた。しかし一方で、海外の和食ブームに対応した輸出、インターネットを活用した個人販売の増加、首都圏での食のイベント開催等での販路拡大、さらに、福島県所縁のTOKIOや様々なキャラクターが販路回復のフラッグシップをとっていることについて、具体的な動画やグッズから実感することができた。

③ 福島・山形両県の併任教師が描く授業構想として

本小単元の核を春から取り組んできたバケツ稲を起点とした米に置き、福島県産米の風評被害の現状と、山形県が開発した「つや姫」の二本立ての授業展開を考えた。日本の食の課題を限られた時間内で実施しなければならず、教師自身が視点を明確に持つ必要があった。その一方で、その視点が社会的に偏ったもので

はないか、たくさんの資料を総合的に見通し、栄養教諭や担任と確認し合いながら授業準備や資料の補充・精選を図っていった。この複眼的な授業構想と、幼児期に被災地に居住していた数名の児童が響き合い、表面的な理解にとどまらず、より深い学びにつながった。さらに、子どもたちの自由闊達な話し合いを「つや姫マイスター」に聞いていただいた上で率直な意見を求めることができる授業スタイルは、今日的な課題に迫るために大変意味深かった。

④ 社会情勢に対する敏感さを伴う社会的な見方・考え方

米の新品種の誕生には、(ア)消費者の嗜好の多様化、(イ)高温や台風被害対策等に対応した、消費者や生産者からの社会的要請が背景にあることを知り、それが全国各地の風土に根差しつつ生産されていることを子どもたちの学び合いを通し、具体的に実感できた。また、「下町ロケット」等のドラマからも現場の工夫や努力をより身近に考える子どもが日々増えている。今日的な難解な課題に対しても思考停止状態になったり、拒否反応を示すことは決してなく、友達同士の学び合いや生活経験や体験学習との有機的な接続から、自分なりの見方・考え方を高めていく姿が印象的である。



⑤ チューター制を視野に入れた学びの連続性について

子どもたちにとって、体験したことを基に話し合いを通して豊かに想像していくことに楽しさを実感してきている。それら体験したことを次世代に引き継ぐことに視野を広げさせていきたいと考えてるところである。具体的には家庭科調理実習で3つの新品種の試食を行うが、それらの体験の良さを学年内に共有するだけに止まらず、下級生(現4年生)に、くまモン応援隊(仮称)を募り、「くまさんの輝き」や自分たちがバケツ稲で育てた米を紹介する企画を主体的に考えさせていきたいと考えているところである。次年度、自分たちが最上級生となったとき、新5年生が自分たちの学びをさらに発展的に高めていけるよう、中・長期的な視点を持ち、さらなる主体的な活動に期待しているところである。

(3) 栄養教諭を核とした食育全体計画との関連から

食に関する指導の全体計画の中に教科等における食に関する指導計画を立てているが、教科との連携がなかなか進まない現状を打開すべく、給食の時間に子どもの実態把握に努めることや給食室 前に子どもの知的好奇心を喚起する掲示を心がけてきた。その蓄積が子どもの食の経験や担任との食に関する授業に結びつけやすい雰囲気になるよう心がけた。そのことで①ティーム・ティーチング、②教材研究、資料提供、③指導計画に基づく打合せといった3つの形で参画することができた。

振り返ってみると、年度当初の計画が子どもの学びたい姿によって柔軟に発展していき、教科を超えたネットワークも構築でき、子どもの実態に根ざしたカリキュラムにつなげられた。その意味 で、栄養教諭のスタンスについて考えさせられたカリキュラムづくりであった。

授業に関わる中で、専門的な知識を子どもたちに伝達するという形だけでなく、応えを子どもたちとのやりとりの中から導き出したり、それをもとにさらに違うことに考えを広めたり、深めたりしていく子どもの姿を大切にしていきたいと感じた。どの教科でも子どもの学びの道筋に食を取り上げて深い学びにつなげられるよう、人をつなぎ、教科をつなぎ、地域をつなぐ可塑性を持った食育全体計画を立てる必要があると考える。そして、食に関する自分たちの課題をどうやったら解決できるのか、身に付けた知識はどんな意味があって、将来どんなことに役立つのかを考えを深めていけるよう関わっていきたい。食育全体計画をカリキュラム・マネジメントの視点から再考した場合、子どもたちの学びの実態により柔軟に対応した発展性のあ

るものに更新していく必要がまだあると考える。今後とも、一層子どもたちの言動に対するアンテナを高く していきたいと考える。

<バケツ稲づくり体験> 芽出し~田植え~稲刈り~脱穀~籾摺り~試食







カリキュラム・マネジメントの実際

バケツ稲づくり(脱穀・籾摺り・試食)

※ 学年全体の取組としてスタート

社会科「米づくりのさかんな地域」

- ※ 国による生産調整の終了
- ・全国の米袋集め(課外)
- ・米袋デザインコンテスト(課外)
- ※ 新品種特設コーナー設置

「これからの食料生産とわたしたち」

<新品種特設コーナー・お米クイズ>





表彰式・社会からの講評、プレゼント等

福島・熊本等、関係機関への手紙

※ 子ども主体の活動へ

家庭科 単元「たべて元気に」

試食後に新潟・熊本等へ食味の 感想を送付

新品種の試食(課外)→他学年へ

熊本の新品種とバケツ稲で自分たちが

・○○隊結成(有志)→PR活動等 バケツ米や隊の名前決定 試食イベント企画 熊本との連絡調整 等 ※ 課外





栽培したの○○米(仮称)のブレンド米

※ この他、お米クイズやタイムリーな話題を含めた食育コーナー を通して、全校的な活動に広げることができている。 昨年度の5年生もバケツ稲づくりに取り組んだが、次年度を 視野に、イベントを通してバケツ稲で収穫した米と熊本の新品 種のブレンド米を使用し、双方向の活動紹介を企図している。



米の産地は全国各地ですね!

長月



發行日:9月27日(水)

発行者:5年2組担任 吉田貴広

保立つ よくある

社会「米作り」に意欲的なみんな!

桜田小5年2組の学習に取り組みの記事が JA グループのホームページに載っています。 総合的な学習の時間とも関連して「環境」や 「生命」について学習を進めている5年2組 です。機会があればご覧ください。



よくある

(山形県)山形市立桜田小学校

2018.09.21 米線を送ってください

9月21日(金銀日)

私たち5年生は、社会料の学習で庄内平野の米づく りについて学んでいて、パケツ部も一緒に関てて います。先日の授業で、住内平野のおいしい米を どう電伝していくかという課題について話し合いま した。その中で、全国のいるいろな米袋から学ぼ うと、いろいるなデザインの米袋をあつめようとい うことになりました。そこで、学内にポスターを はって全校生に呼びかけることにしました。 たく さんの米袋が築まることを、とても楽しみにしてい

いらなくなった米貌でも、私たちにはとても役に立 つので、このページをご覧の全国の皆さまで、協力 してくださる方は、送ってもらえればうれしいで す。(学年での活動のため、送料は負担できません が、よろしくお願いします》 5年2組 児童代表

(米袋送付先) 〒990-2323 山形県山形市桜田 東1-1-30 山形市立桜田小学校 5年2組 児 重代表





学級だより

授業の中で田島先生に見せていた だきました。みんな興味津々上近く まで来て詳しく見ていました。



発行日:10月17日(水) 举行者:5年2個相任 吉田 量広

全国各地とのつながり 一人一人が学びの広がりを実感!

総合的な学習の時間、理科、社会科、そし て、国語などに2組の活動に広がっています。 これは、これまでのおたよりでもお伝えして 😘 きた値りです。

その広がりから、さらに米作りについて 様々な角度から学習活動を深めています。そ の中の一つは、全国各地と連携を取りながら 進めること。今回は熊本からの連絡があり、 「くまもとのお米」という掲示物などが送ら れてきました。

これからの学習に大いに生きそうです。

【戚想】かずまさん

勉強のために (能本の方が) いろいろなグッズを送 ってくれたので、動物に役立てたいと思いました。



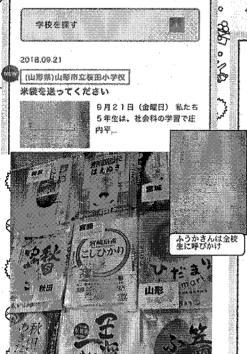
こちらからのアプローチに全 国各地の方が少しずつ応えてく だっています。まさに生きた教材 となっていますわ~。

話を聞いた後は、熊本県についてすぐに 調べていました。

→あかりさん、しゅうたろうさん。







職員室の前に飾ってあります。2

組のみんなが持ってきたものです



学級だより





発行日: 11月7日(水)

発行者:5年担任

吉田 貴広

【社会】米の脱穀の学習

今日の1時間目に、社会の授業で米作りに ついての学習がありあした。食育にもつなが る内容であるために、家庭科室で行いまし

【脱穀をしよう!】

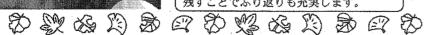
脱穀は、現在では機械であっという間に済 んでしまいます。家庭でもできる機械がある ほど身近で簡単なこと。しかし、昔はどのよ うに行っていたのでしょう?

これは、子ども達が常々知りたいと思って いたこと。総合的な学習の時間にも、けいた さんが「現在と昔の道具を比較することで、 道具の便利さや昔の方の苦労を知ることが できる (←以前の学級だよりから抜粋)」と 言っていたことからもわかります。

子ども違は、今日、また一つ大切な経験を しました。次の学習ペレッツゴー!



ノートもしっかり取っています。記録に 残すことでふり返りも充実します。



多图。如此是一个一个

発行日:11月22日(水)

發行者: 5年担任

吉田 貴広



拾えば保冷剤、捨てれ ばゴミ。4年生のときも 「分ければ資源、捨てれ **ばゴミ」という言葉を学** 習していることをみんな

とうとう「お米」が目の前に

1 学期より様々なプロセスを経て育てて きたイネ。籾殻をむくと、とうとういつもみ んなが目にしている「お米」として姿を現し ました。一つ一つ手作業で「お米」に・・・、 なかなか手間がかかりますが、みんな「もっ としもっとし」と夢中で手が止まりません。 日本人に身近な「お米」について、学習活 動を通して新たな視点で見たり考えたりす ることができるようになりました。





算数「図形の角~」 生活→数理→生活へ

みはねさん

みはねさんは、お家で少し学習してきま した。4つの角にそれぞれ●▲■◆などの 印をつけて分かりやすくして考えました。

私達の生活の中には様々な図形がありま す。そこから図形を見いだし、授業で数理的 な処理で学び、再び生活へとかえります。一 人一人、学習した内容をもとに生活場面を見 直すと、様々な発見があります。新たな見方・ 考え方ができるようになっているのです。







脚味連々のみんな





















グループごとの話し合い。

田島先生とも話しながら、さらに学習

内容が深まって行きます。「あれはどう かな?」「これは?」・・・尽きません。

師走



発行日:12月18日(火)

發行者:5年2組

担任 吉田 貴庆

つや姫マイスター、逸見さん

今日の2時間目に、お米の専門の先生をお 招きして授業を行いました。その名も、「つ や姫マイスター」の発見さんです。

山形県で作られている有名なお米の品種つ や姫!しかし」なんと!「島根県産つや姫」 があるということ。そして、同様に、和歌山 県、岐阜県、長崎県・・・など次々とつや姫が 作られている県が発覚。どういうこと?

「どんな作戦がかくれているのかな?」・・・ 課題に対して、自分たちなりの予想を立て、 みんなで話し合いました。果たしてどのよう 日な理由がそこにあるのでしょう。

そこで、いよいよ逸見さんの登場です。専 門家から聞く話はとても勉強になりました ね。興味津々のみんなでした。

Bまる社会の掲載 田島先生は、1年間の学習活動の流れを考え 時間1時間の授業を組み立てています。







一人一人を大切にした掲示です。次もがんばろう



コンテスト審査のルール

- は理由と名前を大きい付せん 1点は名前を書いてはる。
- 美味しそう、安全・安心、
- 品には1点までOK
- がないものは無効

	S
	488
00 1112	4

## 	
192 B 2 T 2 T 2 T 2 T 2 T 2 T 2 T 2 T 2 T	
NA CALUMATICATION A	B000-6

師走

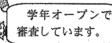


発行日:12月20日(木)

発行者:5年2組

担任 吉田 貴広

以前のおたよりで紹介していた通り、社 会の授業で「米袋コンテスト」が開催され ました。今回の審査員は5年生全員です! 一人一人の投票で決められるもので、「一 人 5点(付箋大1枚、小3枚)」を持って「買 いたくなる」ものに票を入れます。さあ、 どうなるのでしょうね!





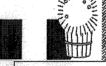


「6 年生を送る会」に向けて

昨日の6時間目に、学年での「6年生を送る会」に向けての話し合いがありま した。本番は2019年に入っての2月にあります。そこを見通して様々な活動 を進めていきます。まずは、学年で、そして、一人一人がどのようなゴールを目 指し、どのようなプロセスを経ていくかが重要です。初めの一歩ですね。







かつき 陸月



發行日: 1月24日(水)

発行者:5年2組

担任 吉田 貴広

充実感いっぱいの社会の授業

朝会の時間に「米袋コンテスト」の表彰式が行わ れました。田島先生からお話があった後、校長先生 より一人一人に手渡しでの表彰がありました!審 査は以前もお伝えした通り、一人一人が悪をもって 投票する方法をとっています。さてさて・・・

いよいよ発表!

最初に準グランプリーそして、次にグランプリ! ・・・みんなのワクワクは止まりません。結果が発表 される度に、入賞者の笑顔とみんなからの拍手があ りました。一人一人よくがんばりました。













こう!」「次は自分





